関西学院 https://www.kwansei.ac.jp/

西宮上ケ原キャンパス（兵庫県西宮市上ケ原）
関西学院中学部
関西学院高等部
関西学院大学 神学部・文学部・社会学部・法学部・経済学部
商学部・人間福祉学部・国際学部
言語コミュニケーション文化研究科・経営戦略研究科

西宮聖和キャンパス（兵庫県西宮市岡田山）
関西学院幼稚園
関西学院短期大学
関西学院大学 教育学部

西宮北口キャンパス（兵庫県西宮市高松町）
関西学院 NISHIKITACROSS
関西学院大学 司法研究科
関西学院大学 心理科学実践センター

神戸三田キャンパス（兵庫県三田市学園上ケ原）
関西学院大学 理学部・工学部・生命環境学部・建築学部
総合政策学部

大阪梅田キャンパス（大阪市北区茶屋町）
K.G.ハブスクエア大阪
関西学院大学 経営戦略研究科

東京丸の内キャンパス（東京都千代田区丸の内）

宝塚キャンパス（兵庫県宝塚市武庫川町）
関西学院初等部

千里国際キャンパス（大阪府箕面市小野原西）
関西学院千里国際中等部・高等部
関西学院大阪インターナショナルスクール

【表紙写真】①迷彩の施された時計台／1945年頃
②ベーツの直筆サイン
③上ケ原キャンパス／1929年頃
④校章
⑤ブランチ・メモリアル・チャペル（現・神戸文学館）
⑥関東大震災ボランティア
⑦最初の神学部卒業生と教員
⑧エンブレム
⑨ベーツの倫理学授業
⑩W.R.ランバス

2024 12,000

輝く自由

関西学院 その精神と理想

The Spirit of Kwansei

関西学院

Mission Statement

Since Kwansei Gakuin was established in 1889, we have experienced wars, natural disasters, and economic and social crises. At times, we have been forced to make major changes in the twinkling of an eye. The COVID-19 pandemic, which began in 2020 and gripped the world all at once, has been one of those times. In order to survive in this drastically changing society, we need to transform ourselves; however, unless we also retain our unique Kwansei Gakuin identity at the same time, we will cease to be Kwansei Gakuin. Everyone gathered at Kwansei Gakuin must unite in order to confront these two conflicting challenges. The mission that has been given to Kwansei Gakuin is to maintain our uniqueness, designate the course of action for transformation, and bring us all together as one. Dr. C.J.L. Bates, fourth President of Kwansei Gakuin, expressed this fact by saying that Kwansei Gakuin is a school with a mission. Our mission is for the entirety of Kwansei Gakuin to embody "Mastery for Service."

This booklet contains our mission statement—our promise to society—and stories of our mission, which has been accomplished in each era. Please read this booklet to get a sense of the fact that everyone connected to Kwansei Gakuin is a part of these mission stories. Going forward, we hope to weave new stories of our mission together with all of you.

Chancellor Motoo Nakamichi

関西学院は、1889年の創立以来、戦争や自然災害、経済的・社会的危機を経験し、時には、一瞬にして大きな変化を強いられました。2020年からの世界的同時パンデミックもその一つです。この急激に変動する社会の中で生き残っていくためには、自らを変革していかなければなりません。しかし同時に関西学院の独自性を保たなければ関西学院ではなくなってしまいます。この2つの相反する課題に立ち向かうためには、関西学院に集うすべての人が一体となる必要があります。私たちの独自性を保ちつつ、変革の方向性を示し、私たちをひとつにしてくれるのが関西学院に与えられたミッションです。このことを第4代ベーツ院長は、関西学院は"a school with a mission"であると表現しました。関西学院全体が"Mastery for Service"を体現することこそ私たちのミッションです。

このブックレットには、私たちが社会に向かって約束するミッションステートメントと各時代の中で成し遂げられてきたミッションストーリーが記されています。ぜひこのブックレットをお読みいただき、関西学院に連なる皆さんがこのミッションストーリーの中に身を置いていることを感じ取ってください。そして、ご一緒に新たなミッションストーリーを紡ぎ出してまいりたいと思います。

院長　中道　基夫

Mission Statement

Kwansei Gakuin, as a learning community based on the principles of Christianity, inspires its members to seek their life missions, and cultivates them to be creative and capable world citizens who embody its motto, "Mastery for Service" by transforming society with compassion and integrity.

By describing Kwansei Gakuin as a "learning community," we understand that education and research are collaborative endeavors. KG was founded on "the principles of Christianity," and these principles continue as the core of its existence. This refers to learning about the theological and cultural aspects of Christianity, including the significance of Jesus Christ, but it also means that all the goals and values of this community are firmly rooted in Christian ideals. Human rights, peace, respect for nature, social justice, and cross-cultural understanding are prime examples of such values that guide our studies and life together toward an inclusive community .

Through this educational environment, all the members, who include students and their families, faculty, staff, and alumni, are motivated to seek new knowledge, and the full life that is most suited to each, based on individual talents, interests, and abilities, as well as social needs.

"Life missions" also include vocations in Christian Ministry, one of the original courses at Kwansei Gakuin, and this training continues as an important element of the Christian principles. The content of a KG education nurtures people to develop social, moral, and academic skills that allow them to participate creatively around the world, and take leadership as agents of change in the societies where they live, thus actualizing the ideal of "world citizen." Like Kwansei Gakuin' s founder, Walter R. Lambuth, world citizens have the skills to communicate and empathize with others, and then take responsibility for creating a better world. KG' s motto, "Mastery for Service," is explained further by emphasizing that its motivation must be the care and concern for others.

ミッションステートメント

関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体（ラーニングコミュニティ）」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー"Mastery for Service"を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命とします。

関西学院は「学びと探究の共同体（ラーニングコミュニティ）」であり、私たちは、教育と研究を二つにして一つの、また、すべての構成員によって担われる協同の営みであると考えています。建学の理念である「キリスト教主義」は、今もなお学院に息づく精神的基盤です。このことは、イエス=キリストという存在のもつ意味を含めて、キリスト教の宗教的側面と文化的側面の双方が探究されることを意味し、同時に、学院という共同体の目的と価値のすべてが、キリスト教の理念に強く根ざしていることを示しています。「垣根なき共同体（インクルーシブコミュニティ）」をめざして、私たちの学びと人生をともに導くそうした価値観の主要な例として、人権、平和、自然への敬意、社会的正義、異文化間の相互理解があげられるでしょう。

こうした学院の教育環境を通じて、児童・生徒・学生とその家族、ならびに教職員、同窓生のすべては、社会の要請に応え、また、一人ひとりの資質、関心、技能に応じて、新たな知を探究し、各人にもっともふさわしい充実した生—すなわち「生涯課題（ライフミッション）」—を追求します。

「生涯課題（ライフミッション）」の語は、学院発足当初の目的であったキリスト教伝道者への召命も意味しますが、そのための教育は、現在もキリスト教主義教育の重要な要素として引き継がれています。関西学院の教育は、社会的、道徳的、学術的な力を涵養することで、そこで学ぶ者が創造力をもって世界で活躍することを可能にし、ひいては、自らが生きる社会を変革するための指導力を発揮するように促します。これは、「世界市民」という理想実現のための手段にほかなりません。世界市民とは、学院の創立者ウォルター・R・ランバスのように、他者と対話し共感する能力を身につけ、よりよい世界の創造に向けて責任を担う人々のことです。関西学院のスクールモットー"Mastery for Service"は、他者への関心と思いやりに支えられたときに、はじめて十全の意味をもつのです。

World Citizen

創立者 ウォルター・ラッセル・ランバス　世界の足跡

The Founder, Walter Russell Thornton Lambuth (1854-1921)

関西学院の創立者であるアメリカ人宣教師（南メソヂスト監督教会）ウォルター・ラッセル・ランバスは、1854年に両親の赴任先であった上海で生まれました。祖国アメリカで医学と神学を修め、中国に戻って医療活動に携わりながら宣教師として活躍し、1886年に32歳で日本に赴きます。

1889年、牧師養成と青年への全人教育を目的とした男子校の創立を計画し、原田の森（現在の神戸市灘区）に木造校舎を建造して関西学院（クワンセイガクイン）と名付けました。始まりは教師5人と生徒19人の小さな学校でした。

ランバスはわずか4年余りの日本滞在期間に数々の教会や学校の創立に関わり、大きな足跡を残しました。離日後も、その圧倒的な行動力によって南米、キューバ、アフリカ、ヨーロッパ、シベリア、中国、朝鮮半島など世界を駆け巡り、伝道活動を続け、特にアフリカへの医療伝道を人生の目標（ライフミッション）として情熱を傾けました。

ランバス家の故郷ミシシッピー州には、一家の働きを記念する碑が建っています。そこには、ランバスの働きに対して“World Citizen and Christian Apostle to many lands”（世界市民であり、世界各地へのキリストの使徒）という句が刻まれています。

●世界宣教会議

●携帯した薬びん

●アフリカ伝道（伝道をともにしたギルバート博士と）

●蘇州病院

●北京協和病院

●関西学院原田の森

●神戸でのランバス一家

●東洋伝道（韓国人の友人と）

●パールリバー・チャーチ

ランバスの略年譜

1 1854年（0歳）　宣教師である両親の任地中国・上海にて誕生。

2 1860年（6歳）　母、妹とともに米国へ帰国。母の実家（ニューヨーク州ケンブリッジ）に預けられる。

3 1861年（7歳）　父の故郷ミシシッピー州パールリバーで生活。

1864年（10歳）　中国に戻る。

4 1869年（15歳）　帰国し、テネシー州レバノンの高校へ通う。

5 1871年（17歳）　エモリー・アンド・ヘンリー大学（ヴァージニア州）に入学。

1875年（21歳）　エモリー・アンド・ヘンリー大学を卒業し、さらにヴァンダビルト大学（テネシー州）で神学と医学を修める。

1877年（23歳）　ヴァンダビルト大学を首席で卒業。デイジー・ケリーと結婚し、新妻とともに中国にわたって医療活動を開始。上海に麻薬中毒療養所を開設。

6 1881年（27歳）　一時帰国し、ベルビュー大学病院（ニューヨーク）で東洋の疾患を研究。医学博士号を取得後に英国にわたり、ロンドン大学、エディンバラ大学などで最新の医学研究に従事。

7 1882年（28歳）　中国に戻って、蘇州病院を開設し、本格的な医療伝道を開始。

8 1884年（30歳）　北京にメソヂスト病院（北京協和病院）を開設。

1886年（32歳）　南メソヂスト監督教会が日本宣教を開始。日本宣教部総理に就任。神戸の住居の一部に読書館（パルモア学院、啓明学院の前身）を開いて伝道・教育活動を開始。

9 1889年（35歳）　関西学院を創立。初代院長に就任。

10 1891年（37歳）　夫人の健康上の理由などで米国に帰国。わずか4年余りの日本滞在であったにもかかわらず、関西学院を創立しただけでなく、阪神間、広島、山口、香川、愛媛、大分に13の教会を創設した（「ランバスの瀬戸内伝道圏構想」A～M）。

11 1894年（40歳）　南メソヂスト監督教会の海外ミッションを統括する任務に就く（以降、16年間）。ブラジル伝道に着手（以後、6回伝道）。

12 1898年（44歳）　キューバ伝道に着手（以後、18回伝道）。

1907年（53歳）　南メソヂスト監督教会全権代表として来日。関西学院で卒業式に出席して演説。

13 1910年（56歳）　教会最高位のビショップ（監督）に選任される。エディンバラでの世界宣教会議で第2部門の議長を務める。

1911年（57歳）　幼い頃からの夢であったアフリカ伝道を開始。

1913年（59歳）　第2回アフリカ伝道。

14 15 1914年（60歳）　中央アフリカ・コンゴに伝道拠点（現在、そこに功績を記念してランバス記念病院が建てられている）を開設。メキシコ伝道を開始（以後、16回）。

1915年（61歳）　第1次世界大戦中を通して世界YMCA運動や赤十字を支援。

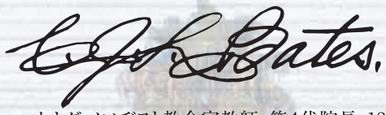
16 17 18 19 1918年（64歳）　メソヂスト年次総会で戦争問題委員会委員長に選任され、ヨーロッパに出発。パリに同委員会本部を設置。ベルギー、チェコ、ポーランドなどでも伝道。

20 1919年（65歳）　中国、朝鮮、日本を含む東洋地区伝道の担当監督となる。会議のため来日し、関西学院チャペルで講話。

21 1920年（66歳）　ウィルソン大統領の特命により、体調不良を押して中国大陸を北上し、飢饉災害地帯を視察。新聞に詳細なレポートを掲載し、救援活動に従事。シベリア伝道を開始。

1921年（66歳）　シベリア、中国、韓国を経由して日本に入り、宣教師会議を開催中に発病して横浜で死去。関西学院のチャペルで告別式が催された。遺骨は上海の外国人墓地に埋葬された。

Mastery for Service



C.J.L.ベーツ（1877~1963）
The Fourth President, Cornelius John Lighthall Bates

カナダ・メソヂスト教会宣教師。第4代院長。1877年、カナダ・オンタリオ州生まれ。クイーンズ大学を1901年に卒業。1918年、モントリオールのウエスレアン神学校から神学博士号を受けました。1902年に東洋伝道への献身を決意して来日。

カナダ・メソヂスト教会が関西学院の共同経営に参与した1910年、関西学院に赴任し、2年後に新設の高等学部長となり、1920年に関西学院第4代院長に就任しました。

高等学部長の時に提唱した"Mastery for Service"が、院長就任とともに、学院全体のスクール・モットーとなりました。院長として20年間にわたり関西学院発展のために尽力し、学院の悲願であった大学昇格に際しては、渡米して連合教育委員会およびアメリカ・カナダ両国伝道局の承諾を得、1932年に大学開設を果たすなど学院の礎を築きました。

"Mastery for Service"
the school motto of Kwansei Gakuin reflects the ideal
for all its members to master their abundant
God-given gifts to serve
their neighbors, society, and the world.

関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”は、
「奉仕のための練達」と訳され、隣人・社会・世界に仕えるため、
自らを鍛えるという関学人のあり方を示しています。

Mastery for Serviceについて
～真理・自主・奉仕～

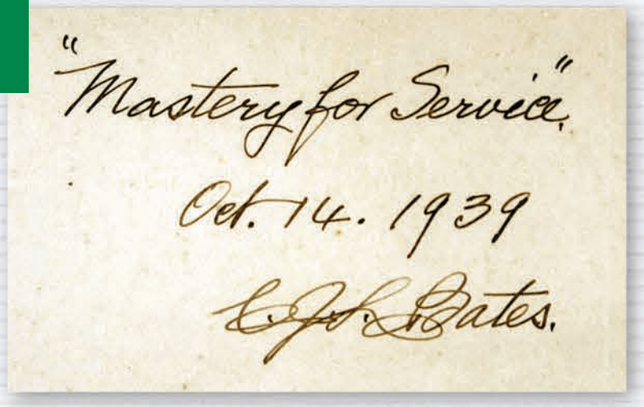
“マスタリー・フォア・サービス”は今日、関西学院全体のスクールモットーであるとみとめられています。1912年、初代高等学部長となったC.J.L.ベーツに提唱されて以来、校歌「空の翼」に唱われ時計台のエンブレムに刻まれて、関西学院のキリスト教主義教育をみちびく指針として時代をこえて受け継がれてきました。

マスタリーとは練達、サービスとは奉仕であって、「奉仕のための練達」と翻訳されます。勉学にはげみ知識・技能をよく修め（マスター）、みずからに与えられた才能を存分に発揮して人格の完成に努めます。しかしそれは、隣人・社会・世界のために奉仕し人類の福祉に貢献すること（サービス）を究極の目的とするのです。この言葉には英語で、マスター（主人）とサーバント（召使い）という意味深い対照があります。仕えるために「支配するもの、主人」となること、「召使い、僕」となるために知識・技能の主人、自分自身の主人となることが求められます。それは「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい」（マタイによる福音書20章26～27節）というイエスの逆説にみちた言葉に示された精神と同じものです。

そこで真に仕える者は、常識にも何ごとにも縛られない自由の人、自分自身にもとらわれない自主の人にならなければなりません。関西学院のさらに歴史の古いモットー「真理将使爾自主（真理はあなたたちを自由にする）」が語るように、聖書に示された真理を探求することによって「真に仕える実力をそなえた自由人」になりえるとの理解がここにあります。そのような人間形成こそが「輝く自由、Mastery for Service」と唱う関西学院が求めつづけるものなのです。

「**真理将使爾自主**（真理は汝らをして自主たらしめる）」（ヨハネによる福音書8章32節）
関西学院発祥の地、原田の森にたつ神学館の正面玄関の上には、この聖書の言葉を刻んだ額面が掲げられていました。この言葉は神学部のモットーであっただけでなく、学院全体のモットーでもありました。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか」（マタイによる福音書16章26節）の聖書の言葉に通ずる学院の人格教育の伝統がこのモットーに示されています。ベーツは、この言葉に語られた自主（自由）こそが「マスタリー・フォア・サービス」を体現する人格の基礎となることを強調しています。

Our College Motto



Our College Motto "Mastery for Service"

Dean C.J.L. BATES, M.A.

Human nature has two sides, one individual and private, the other public and social. There is a life which each man must live alone, into which no one else can enter. That is his personal individual life. But a man's life is more than that. It has another side, which it shares with other men. And it is our duty and privilege to keep before our minds these two sides of our nature. There is an ideal of life corresponding to each side. One is self-culture, the other, self-sacrifice. These ideals are not contradictory, however, but complementary. Neither is complete by itself, nor independent of the other. Self-culture pursued for its own sake produces selfishness. Self-sacrifice as the only rule of life leads to weakness. But self-culture as a basis for self-sacrifice is not only justifiable, but necessary. And self-sacrifice on such a basis is truly effective.

Now these two phases of our nature are implied in our college motto "Mastery for Service". We do not desire to be weaklings. We aim to be strong, to be masters - masters of knowledge, masters of opportunity, masters of ourselves, our desires, our ambitions, our appetites, our possessions. We will not be slaves whether to others, to circumstances, or to our own passions. But the purpose of our mastery must be not our own individual enrichment, but social service. We aim to become servants of humanity in a large sense. In England the officials are called civil servants, and the highest officials Ministers of State. That implies a true conception of the nature of the work of an official. His duty is not to command, but to serve. In fact, a man is great only to the extent to which he renders service to society.

This then is our college ideal, to become strong, effective men, not weak incompetents; men who will be recognized as masters. But having become masters we desire not to inflate, and enrich ourselves for our own sake, but to render some useful service to humanity in order that the world may be better for our having lived in it.

Our ideal business man is neither a gambler nor a miser, but a man who succeeds because he is a master, a man who understands the fundamental principles of business, who knows what to do, and who by industry and honesty is able to succeed where other men might fail – a man whose object in life is not merely to increase his credit balance in the bank, but to use his financial power to improve the condition of society; – a man who has public spirit, and a keen sense of social duty. Such a man will be revered by his employees, and respected by his customers.

Our ideal of the scholar is not a kind of intellectual sponge that always takes in, but never gives out until it is squeezed; but it is a man who loves to acquire knowledge not for its own sake, much less for the sake of his own fame, but whose desire for knowledge is a desire to equip himself to render better service to humanity.

It is said that on the monument of a certain man there were cut the words "Born a man and died a carpenter. " We desire no such fate. For such an end is failure. Nor would it be any greater success if it were written "Born a man and died a merchant" - or "a millionaire" - or "a politician." To be a man, a master man and at the same time a true servant of humanity is our ideal.

This essay was published in 1915 when Kwansei Gakuin was an all-male school.

私たちの校訓「マスタリー・フォア・サービス」

C.J.L.ベーツ

人には二つの面があります。一つは個人的で私的な面、もう一つは公的で社会的な面です。

人それぞれに、ただ一人で生きるべき生活があり、これには誰もたちいることができません。それは一人ひとり別々の、個人としての生活です。しかし、人の生活はそれだけのものではありません。もう一つの面が人の生活にはあります。この面を私たちは他の人々と分かち合っています。人のこの両面をつねに心にとめておくことが私たちの責務であり、また与えられた恵みです。

このそれぞれの面にふさわしい人生の理想があります。一つは自己修養であり、もう一つは献身（自己犠牲）です。しかも、この理想は相反するものでなく、むしろ相補うものです。いずれも、一方だけでは完全でなく、もう一つの理想から独立したものでもありません。自己をきたえることを、ただそれだけを目的に追求するとすれば自己本位になってしまいます。一方、自己をささげることが人生の唯一の規範であるならば、“意気地なし”ができあがります。しかし、自己の修養は献身の土台なのですから、それは正当なものであるばかりか、必要なものです。自己修養のような土台があってこそ献身はほんとうに効果を発揮するのです。

ですから、校訓「マスタリー・フォア・サービス」という言葉が意味するのも、人にこの二つの面があるということなのです。私たちは“弱虫”になることを望みません。私たちは強くあること、“さまざまなことを自由に支配できる人”（マスター）になることを目指します。マスターとは、知識を身につけ、チャンスをみずからつかみ取り、自分自身を抑制できる、自分の欲、名誉や飲食や所有への思いを抑えることができる人です。

私たちは、他人や境遇、あるいはみずからの情念に“縛られた人”（奴隷）になるつもりはありません。私たちがマスターになろうとする目的は、自分個人を富ますことでなく、社会に奉仕することにあります。私たちは、広い意味で人類に奉仕する人になることを目指しているのです。英国では、公職にある者が“国民への奉仕者 civil servants（公務員）”と呼ばれ、最高位の公職者が“国家のしもべ Ministers of State（国務大臣）”と呼ばれています。これは公職者の働きの本質をうまく表わした呼び名です。公職にある人の責務とは命令することでなく、仕えることなのです。要するに、人の偉大さはどれだけ社会に奉仕をおこなったかによって決まるのです。

それゆえ、本校の理想は強くて役に立つ人になることであり、弱くて使いものにならない人になることではありません。それぞれがマスターと認められる人になることです。しかし、マスターになったとしても、威張ってみせたり、贅沢をしたりすることを望むのでなく、この世界が、自分が生きていたことによって、より良くなることを目的として、人類のために何か有益な奉仕をすることを願うのです。

私たちが理想とする事業家は賭博師でも守銭奴でもありません。マスターであるがゆえに、成功する人、事業の基本原理を理解し、なすべきことを知っている人、他の人ならば失敗しかねない場合でも勤勉と正直により成功を収める能力がある人です。たんに銀行の預金高を増やすことでなく、その財力を社会状況の改良に用いることを人生の目的とする人、公共心をもち、社会的義務に鋭い感覚をもっている人なのです。そのような事業家は従業員からも敬愛され、顧客からも尊敬されるでしょう。

私たちが理想とする学究の徒は、ただ知識を吸収するだけで、絞られるまで他に与えない、知識のいわばスポンジのようなものであってはなりません。知識を喜んで探求するとしても、ただ知識を得るためでなく、ましてみずからの名声のためでもなく、人類により良い奉仕を行うことを目指して知識を探求することが学究のあるべき姿です。

墓碑に「人として生まれ、木工（たくみ）*として死す」などと刻まれることがあります。私たちはそのような人生の結末を望みません。そのような終わり方は人生の成功とは言えません。「人として生まれ、商人として死す」あるいは「人として生まれ、大金持ちとして死す」「人として生まれ、政治家として死す」—そのいずれであっても、同じように成功だとは言えないのです。真に人である、つまり「マスター」であると同時に人類に真に「仕える人」であること、これが私たちの理想とするところです。

*）「木工（たくみ）」とした言葉は“carpenter”です。ベーツは、「木工の家」に生まれたナザレ人イエスを想起しながらこの言葉を記したと思われます。その場合、「人として生まれ」たイエスこそが「生ける神、世の救い主（キリスト）」であるというキリスト教のメッセージが前提にされています。したがって、その趣旨は職業の貴賤を論じることではありません。

この英文は、高等学部商科の学生が1915年に刊行した『商光』創刊号に、C.J.L.ベーツ高等学部長（後の第4代院長）による講演論説「OUR COLLEGE MOTTO“MASTERY FOR SERVICE”」として掲載された歴史的文書です。“College”は高等学部（商科の他に文科がありました）の英文名称で、当時の関西学院は男子校でした。C.J.L.ベーツは、原田の森時代に初代高等学部長となり、高等学部のモットーとして“Mastery for Service”を提唱しました。この言葉は当時の高等学部校舎であった旧本館内に大書され、上ケ原移転の後は時計台（旧図書館）正面の楣間（びかん）と中央講堂のプロセミアン・アーチに掲げられ、全学院のモットーとみなされるに至りました。

Origin & Symbol

関西学院を形づくった人物たち

ジョン・ウェスレー（1703~1791）

メソヂスト運動の創始者。英国国教会司祭の家庭に生まれ、幼い頃に火炎の中から救出されたことから強い召命感を抱くに至る。国教会の司祭となり、弟のチャールズらと「神聖クラブ」（後の「メソヂスト」）の活動を指導。その後モラヴィア兄弟団の人々の敬虔な信仰に触れて「回心」し、87歳で亡くなるまで伝道に尽力。彼の死後、この運動はメソヂスト教会として国教会から独立し、特にアメリカで広まった。

吉岡美国（よしおか よしくに）（1862~1948）

第2代院長。京都市に生まれる。兵庫ニュース社に勤務していた時期に日本伝道を開始した直後のランバス父子と出会い、彼らとの交流を通して信仰を得、学院の創立に協力。1890年アメリカのヴァンダビルト大学神学部に留学、帰国した92年に院長に就任、以来1916年まで院長を務めた。「敬神愛人」を唱え、関西学院発展の基礎を固めた。

W. M. ヴォーリズ（1880~1964）

ウィリアム・メレル・ヴォーリズは、米国生まれの建築家で、原田の森の煉瓦造校舎群や、上ケ原に移転した際にスパニッシュミッションスタイルに統一した新キャンパスを設計した。数多くの西洋建築を手がけ、本学の時計台を含む多くの建築物が国の登録有形文化財に指定されている。若きベーツも出席していたカナダ・トロントにおける学生世界宣教義勇大会にヴォーリズも出席し、アジアでの宣教活動を決意したと言われている。近江兄弟社を設立してメンソレータムの販売などによる実業的活動を通じ、熱心な伝道活動を展開した。

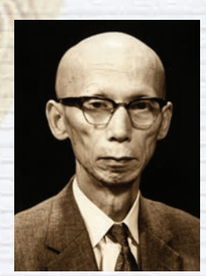
J. W. ランバス（1830~1892）
M. I. ランバス（1833~1904）

学院創立者ウォルターの両親、ジェイムズ・ウィリアムとメアリー・イザベラは、32年間の中国宣教の後、1886年神戸に転任。居留地47番の住居を拠点として、ウィリアムは夜間英語学校（後の読書館）、メアリーは聖和大学の源流となるランバス記念伝道女学校を開設。ウィリアムは6年間の日本宣教の後、神戸で亡くなり、メアリーは夫の死後いったん米国に帰国後、再来日して伝道女学校校長を務めた。

J. C. C. ニュートン（1848~1931）

第3代院長、初代図書館長。1848年米国サウスカロライナ州に生まれ、南メソヂスト監督教会牧師となり、88年に来日し、翌89年の関西学院創立とともに初代神学部長に就任。「関西学院育ての親」と慕われ、創設期の学院と苦楽をともにした。敬虔な生活と精魂を傾けた教育によって人々に偉大な感化を与え、終生、愛と奉仕の生活を続けた。

矢内正一（やない まさいち）（1900~1984）



新制中学部初代部長を18年間、関西学院理事長を5年間務める。イギリスのパブリックスクールに教育の理想を求め、神を畏れ、学力のみならずキャンプ、駆け足等によって、身体・精神を鍛える教育を実践した。「美しく、正しく、強い心の持ち主となれ」というモットーは「矢内イズム」として継承され、少年たちに夢と希望を与え、現在の中学部教育の支柱となっている。

校章

1894年、関西学院創立期に制服および制帽を決定するに当たって教員・生徒からなる委員会が設定され、生徒から提出された新月（弦月・三日月）、教員から提出された「K.G.」の2字を総合して現在の校章が決定された。それは、月が太陽の光を受けて自らを輝かせ続ける者であるという自覚と、新月がやがて満月へと完全を目指して輝く存在であるように、ひたすら理想を憧れ求めて、進歩向上してゆくことを象徴するものという意味づけがなされている。

エンブレム

スクールモットー“Mastery for Service”を土台にした楯の中央に十字架をかたどり、4つのシンボルを配置。右上は新月を表し、中学部を意味する。左上は聖書を表し神学部を、右下はギリシャ（ローマ）神話における商人の守護神ヘルメス（マーキュリー）の杖を表し高等学部商科を、左下は知識・文化の光「松明（トーチ）」の背後にペンを配して高等学部文科を意味している。第4代院長C.J.L.ベーツにより、キャンパスが上ケ原に移転した1929年に制定された。

校歌「空の翼」

北原白秋　作詞
山田耕筰　作曲

1. 風に思う空の翼
　輝く自由　Mastery for Service
　清明ここに道あり我が丘
　関西　関西　関西　関西学院
　　ポプラは羽ばたくいざ響け我等
　　風　光　力　若きは力ぞ
　　いざ　いざ　いざ　上ケ原ふるえ
　　いざ　いざ　いざ　いざ上ケ原ふるえ

2. 眉にかざす聖き甲
　萌えたつ緑　Mastery for Service
　躍々更に朗らよ我が自治
　関西　関西　関西　関西学院
　　（以下繰り返し）

3. 旗は勇む武庫の平野
　遙けし理想　Mastery for Service
　新月ここに冴えたり我が士気
　関西　関西　関西　関西学院
　　（以下繰り返し）

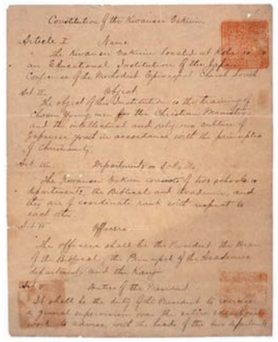
新校歌発表会 中央は山田耕筰

校歌「空の翼」は1933年に、前年の大学昇格を記念する意味もあって、北原白秋が作詞し、同窓の山田耕筰が作曲しました。それ以前の1900年頃に歌われていたのは、「Old Kwansei」。このほかに、創立50周年を記念して1939年に作られたのが、“第二校歌”と呼ばれる「緑濃き甲山」。また、1949年に創立60周年を記念して作られたのが、「A Song for Kwansei」です。

History

キリスト教主義教育

関西学院設置の目的として「the intellectual and religious culture of youth in accordance with the principles of Christianity」と関西学院憲法に記されるように、キリスト教主義を建学の理念に据え、世界・社会に奉仕する全人的な教育を志向した。


創立当時の学院憲法（英文）

1899年の「文部省訓令第12号」の発令によって学院の存続が危ぶまれたが、第二代院長吉岡美国は、「聖書と礼拝なくして学院なし」と喝破して、これを堅持した。創立以来のキリスト教主義教育は今日まで大切に継承されている。

新しい一貫教育

第二次大戦後、日本の学校制度が改められた。新学制により中学部（1947年）、高等部、大学（1948年）が開設され、新しい一貫教育を再開。1960年代に日本が高度経済成長を迎えると、変革を求める学生の不満が高まり、大学紛争が各地で起こるようになった。関西学院大学でも1967年から1969年に大きな紛争となった。小寺武四郎・学長代行（当時）は「学長代行提案」を発表し、少人数教育や学部をこえた教育制度など大学改革が進められた。

大学紛争の様子

学院の発展

21世紀の新たな学院の発展を期して、1995年、神戸三田に新たなキャンパスが開設され、学際的な学びを特長とする総合政策学部が開設された。2001年に移転した理学部は理工学部に改組され、文理融合型のキャンパスとして発展した。大学院でも、言語コミュニケーション文化研究科が開設され、専門職大学院として司法研究科や経営戦略研究科も開設された。2008年には初等部が開設され、大学には人間福祉学部が設置された。2009年には学校法人聖和大学との合併によって教育学部が新設され、この教育学部、聖和幼稚園、聖和短期大学から成る西宮聖和キャンパスが開設された。2010年に学校法人千里国際学園と合併し、千里国際中等部・高等部・大阪インターナショナルスクールも学院の一員に加わった。大学には11番目の学部として国際学部が開設された。

神戸三田キャンパス

西宮聖和キャンパス

1889 — 1899 — 1900 — 1910 — 1912 — 1929 — 1932 — 1947 — 1948 — 1995 — 2000 — 2008 — 2009 — 2010 — 2014（125周年）～

関西学院の創立

関西学院の歴史の源流は18世紀のイギリスで起こったメソヂスト運動にさかのぼる。メソヂスト運動の指導者ジョン・ウェスレーの言葉“I look upon all the world as my parish”。米国南メソヂスト監督教会宣教師W.R.ランバスはウェスレーの教えの下に、世界中で伝道活動を続け、1889年、神戸・原田の森（現在の神戸市灘区王子公園）に関西学院を創立した。創立時は、教師5人と生徒19人の小さな学校であった。

原田の森キャンパスの校舎起工式

創立当初の学生と教員

「原田の森」から「上ケ原」へ

1910年にカナダ・メソヂスト教会が学院の経営に参加するようになった。これを機縁に、1912年に関西学院の高等学部（文科・商科）が設立された。初代高等学部長であり、後に第四代院長となったC.J.L.ベーツがこの時、“Mastery for Service”を提唱した。この言葉は、次第に全学院のスクールモットーとして浸透していった。関西学院は1929年には大学の設置を目指して、上ケ原（甲東村、現在西宮市）へと移転した。1932年、「大学令」により、関西学院大学設置が認可され、1934年に法文学部と商経学部が開設された。これに先だって1933年、校歌「空の翼」が制定された。

ベーツ院長の倫理学講義

移転当時の西宮上ケ原キャンパス

総合学園へ

2019年に、西宮北口キャンパスが開設（司法研究科が移転）され、現在、関西学院は8つのキャンパスで幼稚園から大学院まで約3万人が学ぶ総合学園となっている。

2014年には、高等部が（2015年からは千里国際高等部も）文部科学省スーパーグローバルハイスクールに、大学がスーパーグローバル大学創成事業に採択された。また2019年度より高等部は、スーパーグローバルハイスクールの後継事業となるWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の事業拠点校として採択され、関西学院は、国際的な貢献ができる人を育む教育機関として、今後もより良き発展を目指している。

さらに、2021年4月から“Be a borderless innovator.”をコンセプトとして神戸三田キャンパスの再編が行われ、理学部・工学部・生命環境学部・建築学部・総合政策学部の5学部体制による新たな歩みが始まった。

千里国際キャンパス

宝塚キャンパス

Service Activity

関西学院では、“Mastery for Service”を体現する世界市民を目指してさまざまな活動を実践しています。

献血活動

関西学院大学宗教総部献血実行委員会では、1963年の結成以来、学内で定期的に献血活動を実施してきました。兵庫県赤十字血液センター協力のもと、献血バスを学内に停めて、学生らへ献血協力を呼びかけています。現在までに10万人を超える献血協力者を数えています。このほか献血活動は関西学院高等部でも実施されています。

ボランティア活動支援

1995年の阪神・淡路大震災を機に発足した「関西学院救援ボランティア委員会」では学生や教職員が一丸となって、さまざまな救援活動を実施しました。救援ボランティア委員会を母体として組織された「ヒューマンサービスセンター（HSC）」では、その後も東日本大震災での復興支援ボランティアなど、多くのボランティア活動に取り組んできました。HSCの精神は引き継がれ、2016年には「ボランティア活動支援センター」が設置され、そのもと、「ヒューマンサービス支援室」がボランティア活動への支援を行なっています。

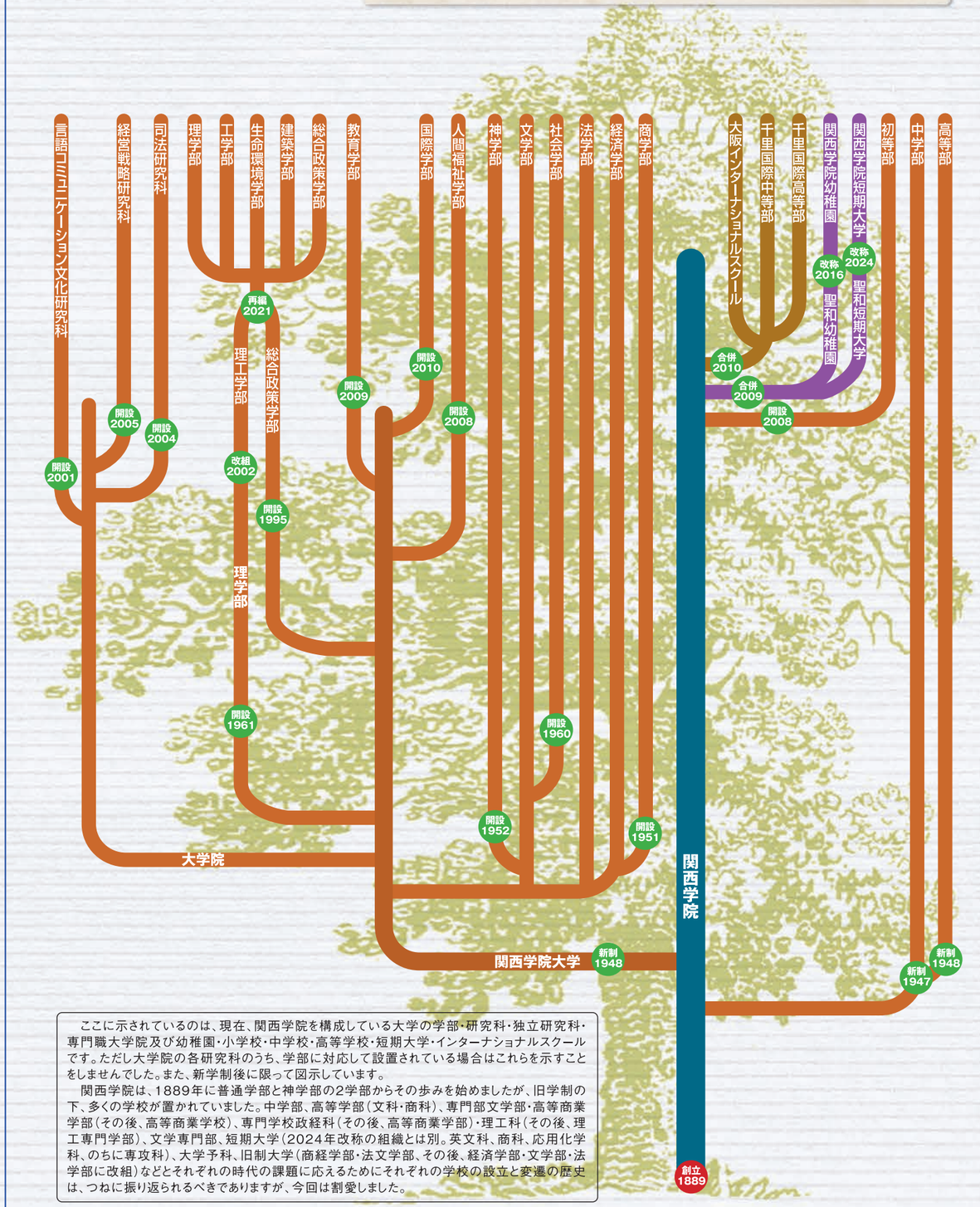
国際学生ボランティア

学生時代に海外の国際協力の現場を体験できる、本学ならではのユニークで挑戦的な「実践型“世界市民”育成プログラム」の中核であり、2004年に国連ボランティア計画（UNV）とアジアで初めて協定を結び、開発途上国へ学生をボランティアとして派遣している「国連ユースボランティア」と、2013年度にスタートした本学独自のプログラムで、国際協力機構（JICA）、赤十字国際委員会（ICRC）、開発途上国の教育機関、NGO等の現場で平和構築、環境保全、スポーツ指導、日本語教育、IT教育等様々な分野の活動に学生が参加する「国際社会貢献活動」の2つのプログラムから構成されています。

関西学院は、初等部ではペットボトルキャップをワクチンに変えて、必要な子供たちへ送る活動、書き損じはがきや使用済インクカートリッジを集める活動、中学部では「あしなが学生募金」や「骨髄バンクキャンペーン」に協力し、街頭でそれぞれの活動のアピールと募金の呼びかけ、高等部では1959年より児童養護施設などで暮らす子どもたちを招待する「子ども会」の開催や、東北や熊本など、大きな災害が起こった被災地でのボランティア活動などをしています。

このほかにも関西学院ではスクールモットー“Mastery for Service”の実践として、各学校でさまざまな形での社会貢献活動を実施しています。

「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」（マルコによる福音書4章30〜32節）



ここに示されているのは、現在、関西学院を構成している大学の学部・研究科・独立研究科・専門職大学院及び幼稚園・小学校・中学校・高等学校・短期大学・インターナショナルスクールです。ただし大学院の各研究科のうち、学部に対応して設置されている場合はこれらを示すことをしませんでした。また、新学制後に限って図示しています。

関西学院は、1889年に普通学部と神学部の2学部からその歩みを始めましたが、旧学制の下、多くの学校が置かれていました。中学部、高等学部（文科・商科）、専門部文学部・高等商業学部（その後、高等商業学校）、専門学校政経科（その後、高等商業学部）・理工科（その後、理工専門学部）、文学専門部、短期大学（2024年改称の組織とは別。英文科、商科、応用化学科、のちに専攻科）、大学予科、旧制大学（商経学部・法文学部、その後、経済学部・文学部・法学部に改組）などとそれぞれの時代の課題に応えるためにそれぞれの学校の設立と変遷の歴史は、つねに振り返られるべきでありますが、今回は割愛しました。

Words

ことば

I shall be constantly watching.

私は常に見守っていよう　（ランバス）

学院の創設者 W.R. ランバス最期の言葉（1921 年 9 月に横浜で死去）。ランバスは、軽井沢の宣教師会議で発病。前立腺肥大治療のため入院、手術を受けた。経過は良好だったが、その後心臓発作を併発し、9 月 26 日午前 5 時 35 分、J.C.C. ニュートンらに見守られ、66 年の生涯を終えて天に召された。

Noble Stubbornness

（畑歓三／ジョン・ドライデン）

「ノーブル・スタボネス（Noble stubbornness）」は、関西学院大学体育会のモットーで「高貴なる粘り」「品位ある不屈の精神」「気品の高い根性」などと訳される。1920 年に硬式庭球部の畑歓三部長（高等学部教授）が部の標語として掲げ、後に体育会全体のモットーとなって総合体育館や中学部校舎の前に記念碑が建てられた。この言葉は、17 世紀のイギリスの詩人ドライデン（J.Dryden）の詩にもあらわれている。

関西学院において人間を学び、早稲田大学において日本を学び、オックスフォード大学において世界を学んだ。

（永井柳太郎）

雄弁政治家と呼ばれ、昭和初期、電力国家管理など社会政策的事業に手腕をふるった永井柳太郎は、関西学院普通学部（関西学院創立時に設置された学部の一つ）に学び早稲田の教員を経てオックスフォードに留学した。軍部の台頭で、国会は次第にその機能を失っていくが、永井はキリスト教社会主義を捨てず最後まで議会に踏みとどまる。その彼を支えたのが関西学院の教育だった。永井は「私にとって学院は第二の故郷である。この母校においてキリスト教の感化を受けた。肉体の生国は加賀だが、精神の生国は学院である」と常に語っていた。

Keep this holy fire burning.

この聖なる火を絶やさぬように　（ベーツ）

太平洋戦争勃発前の 1940 年 12 月に、やむを得ず学院を去ることになった第 4 代院長 C.J.L. ベーツが遺した言葉。学院への深い愛と祈りがこめられた惜別の言葉であり、学院の歩みに深く刻み込まれている。

Kwansei Gakuin depends upon you.

（アームストロング）

第2代高等学部長を務めた R.C. アームストロングは、常に “Kwansei Gakuin depends upon you.”（関西学院は君の肩にかかっている）と学生に呼びかけ、自覚を促した。

白木真寿夫少年の像

（しらきますおしょうねんのぞう）

1933 年 4 月 1 日、旧制中学 5 年生だった白木少年は、いとこと一緒に須磨海岸でボートに乗っている時、通航した汽船の横波を受け、海に投げ出されたいとこを助けに制服のまま海に飛び込んだ。

いとこを救助船に預けることはできたが、白木少年は力尽きて海中に沈んでしまい帰らぬ人となった。白木少年が「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」という聖書の言葉を生きたことを覚え、中学部精神を表す記念として像がつくられた。毎年、入学式の頃に美しい花が満開となる「白木桜」の記念樹と共に白木少年の像は生徒たちの心にその美しい生き様を刻み続けている。